

『 罪の本質 』

ローマ人への手紙 1章 18～23節

青木 信太郎 牧師

◆ 神の怒り

今朝の箇所から3章20節まで、パウロは「人の罪」と「神の怒り」について説明しています。1章18-32節までは“異邦人の罪”について、2章1節-3章20節までは“ユダヤ人の罪”について言及していますが、その内容を見ると異邦人もユダヤ人も大差はなく、人はみな罪人であることをパウロは教えています。ローマ書の主題である「信仰義認」を正しく理解するためにパウロは先ず徹底的に“人の罪”と“神の怒り”を説明するのです。

18節【**というのは**】と訳される接続詞は、直前の内容を受ける言葉です。17節と18節で共通の表現が用いられています。【17節 神の義が啓示されている】に対して【18節 神の怒りが天から啓示されている】であります。「神の義が現されているということは、神の怒りもまた現されている」とパウロは語り出しているのです。私たちはこれを胸に刻む必要があります。ともすると私たちの罪を赦される神様は優しい神であることが強調されます。贖いのために御子イエス様を与えてくださった神様は愛の神様です。しかし義なる神様は怒っておられる神様であることを覚えなくてはなりません。義なる神様は全く正しいお方ですから、罪と悪に対して怒られる神様なのです。それは私たち人間が持つ感情的な、勝手気ままな、それぞれ違う物差しで計る怒りではありません。義なる神様のご性質です。罪も悪もない全く正しい義なる神様は、罪と悪に対して怒る神様なのです。18節はギリシャ語原文の順序で直訳するならば、「**というのは、神の怒りが天から啓示されているから**です。不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して。」となります。「不義をもって真理をはばんでいる人々」とは誰のことでしょうか？パウロは異邦人、異教徒を強く意識してこのように表現していると思われれます。真理とは義なる神様について明らかにされていることです。パウロは「異邦人、異教徒たちは不義のために、義なる神様について明らかにされていることを阻んでいる」と語りました。そんな異邦人、異教徒たちの「不敬虔と不正」に対して神の怒りが明らかにされているというのです。不敬虔と不正は同義語ですが、それぞれの言葉が持つ意味を掘り下げれば、「不敬虔」とは神を神として恐れようとしない、神の前に敬虔ではない罪と言えるでしょう。「不正」とは不敬虔ゆえに神の前に正しくない悪い思いや行い、道徳的な乱れを指しています。従って不敬虔と不正は密接に繋がっている罪の性質です。そこでパウロは、不義をもって真理をはばむ異教徒たちの「不敬虔」について説明することで、神の怒りの理由を明らかにするのです。

◆ 一般(自然)啓示

異邦人や異教徒たちの不敬虔に対して神の怒りが表されている理由が19-20節です。ここで【**神について知りうることは**】と訳されている原文は、「神について知らされている事柄」という意味です。義なる神様について「知ることが出来るよ」ではなく、「知らされていますよ」という意味です。なぜなら神様ご自身が明らかにしてくださっているのだからとパウロは言うのです。19節で【**彼らに明らかであるから**】と訳される“彼らに”という箇所の前置詞が持つ意味を忠実に表すならば、「彼らのうちに、彼らの中に」という意味になります。ですから19節を丁寧に訳すならば、「神について知らされている事柄は、彼ら異邦人、異教徒たちの中に明らかですよ。なぜなら神が明らかにされたからです」となります。どの様に明らかにされているのでしょうか？続く20節です。「なぜなら、神様の目に見えない本性、すなわち神の永遠の力とそのご性質は、世界の創造以来、すべての

被造物たちによって知らされており、はっきりと認めることが出来るのです」とパウロは語っています。これが代々の教会が一般(自然)啓示と呼ぶ教理の原点です。

私たちは大自然を見渡すとき、人の力とその限界を遥かに凌ぐ神様の創造の偉大さに気付かされます。しかしここで注目したいことは、私たち人間も神様によって創造された被造物であるということです。19節で「彼らのうちに、彼らの中に明らかですよ」とパウロが説明していたことを心に留めなければなりません。大自然のみならず私たちもまた被造物です。唯一“神のかたち”に似せて創造された私たちのうちに、義なる神様の永遠の力とご性質が明らかにされているということなのです。人が神を求める所以はここにあると言えるでしょう。パウロは「神様の目に見えない本性、すなわち神の永遠の力とご性質は、天地創造以来、大自然も生き物もそして自らのうちにも明らかにされており、はっきりと認めることが出来る。しかし異邦人、異教徒たちはそれを認めようとせずに不義をもって真理を阻んでいる。だから彼らに弁解の余地はないのです」と厳しく語りました。

◆ 罪の本質

神様が創造された大自然、天地万物を通して、神様の永遠の力とご性質は知らされており、はっきりと認められる。そして神のかたちに創造された自らのうちに神様の力とご性質が明らかにされているにも拘らず、異邦人、異教徒たちはそれを阻んで不敬虔に陥ったのだとパウロは説明しました。先に触れたように、不敬虔とは、神を神として畏れようとしない、神の前に敬虔ではないということです。すなわち、これが罪の本質に他なりません。【21節】「神を神としてあがめず」は直訳すれば「神に栄光を帰さず」という意味です。神を神と認めない、栄光を帰さない、褒め称えることもしない、神を畏れないことこそ彼らの不敬虔であり、罪の本質であるとパウロは教えているのです。かつてソロモン王は【主を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは悟りである(箴言9章10節)】と教えました。しかし神を神として畏れず、栄光を帰そうとしない異邦人、異教徒たちはその罪ゆえに、ますますその思いは虚しくなって、無知な心は暗くなったとパウロは語ります。【22, 23節】神を神として畏れない彼らは真の知恵には至らず、自分では知者といいながら愚か者へと転落して行く。そして偶像を作り出して行くのである。神が創造された被造物を神として称えるようになってしまったとパウロは説明したのです。私が最初に牧師として赴任した愛媛県東温市は西日本最高峰の石鎚山を臨む町でした。冬になると石鎚山は冠雪して、とても素敵な景色でした。スイスから来た協力宣教師も石鎚山を見てスイスを思い出すと仰っていました。そして石鎚山の山頂には富士山と同じく鳥居が設けられていました。そうです。石鎚山は霊峰として古くから山岳信仰の象徴でもありました。世界の中でもとりわけ日本は八百万の神の国として有名です。神のかたちとして造られた人間は、自らのうちに真の神様のご性質が明らかにされているにも拘らず、その真理を阻むのです。不滅の神の御栄えを他の被造物に勝手に与えて拝むのです。真の神を神として畏れず、被造物に神を見出すのです。この不敬虔こそ罪の本質なのです。

◆ まとめ・お勧め

私たちは今朝、真の神様を神として畏れ、栄光を帰すべく礼拝できる幸いを共に噛み締めたいと思います。それはすなわち神の怒りを免れているということに他なりません。では、どうして私たちは神を神として畏れることが出来るのでしょうか？それがローマ書の主題テーマであります。福音を信じる信仰によってのみ義と認められ、救いを得ることが出来るのです。私たちはこの信仰の現われとして今、神を神として畏れて、栄光をお帰しして神様を礼拝するのです。

そして、私たちの信仰生活において試練や誘惑が起こる時、私たちは他の被造物、自分の思いや考えを神様より優先することは無いだろうか？神を礼拝する事より大切にしていることは無いだろうか？そのような自己点検をも今朝することが出来れば幸いです。